

## 島袋寛盛：海の中って面白い！

小さい頃からワカメやヒジキなどの海藻を食べていた私ですが、初めて食べ物以外の“藻類”としての海藻に出会ったのは、大学3年生になった時でした。当時、カニやエビなど甲殻類の生態についての研究を希望していた私は、必修科目という理由で水産植物学の授業を受けました。授業が終わった後に先生の研究室に質問に行きました。先生と雑談をする中で、私が結婚式や運動会のカメラマンのアルバイトをしている話をすると、写真が得意なら海藻サンプルの撮影を手伝ってくれないかと言われました。後日、バットの海水に浸された海藻の写真を撮っていると、ファインダー越しに見える海藻の色の美しさや形態の多様さにとっても驚き感動しました。その中で私が何より驚いたのは、ホンダワラ属の形態です。陸上の植物のように葉や主枝や付着器と形態が分化し、気胞という空気の詰まった小囊をもつ姿は、今までに私がイメージしていた海藻とは全く別のものでした。これをきっかけにホンダワラ属など海藻の形態に興味を持った私は、何度か研究室に通わせていただき、半年後には卒論生として先生の研究室の門をたたいていました。

研究室に入ってから、当時まだ比較的知見の少なかった南日本沿岸域に生育するホンダワラ属の分類についての研究に取り組み、今も私のテーマのひとつとして継続して行っています。ホンダワラ属の分類は、生育場所や生長段階によって形態が大きく変異する為に非常に難しく、始めは調査に行く先々で諸先輩方から辞めた方がいいと言われました。しかし、押し葉標本だけではなく何度も現場に行き海に潜り、そのホンダワラの生きている様子を何年も観察し続けているうちに、ホンダワラという生き物の種についてほんの少しだけ理解できてきたかもしれません。それでもまだ分からないことがたくさんあります。今では種の分類を行う際には、DNAの系統解析が必須となります。ホンダワラ属についても、初期のITS2だけではなく様々な領域のデータも蓄積され、分類学的な再検討が進んでいます。しかし、どんなに分子系統解析の技術が進み知見が増えても、できるだけその結果が再びホンダワラ属の外部形態の形質へとフィードバックされるべきだと考えています。

「このホンダワラの種類は何ですか？」と聞いていただくことがあります。自分では明らかにこの種だと認識していても、「この葉の鋸歯の感じが・・・」や「塩基配列の違いが・・・」など、質問者が後で同定できるようにうまく説明できないことがあります。しかし分類学が科学である以上、再現性がなければいけません。ホンダワラ属に関しても、“あの人に聞けばわかる”というのではなく、専門家が分類した結果を元に、誰もが再現性をもって種の同定ができるような知見を提供していくことも、これからの仕事のひとつだと思っています。また、世界中を見てもホンダワラ属は、環境の違いによる可塑性によって変化した形態により、だいぶ細かく種が記載されているように思います。今後は外部形態や分子系統解析の結果、生態的な特徴も併せ慎重にまとめて



いかなければいけないと考えます。

自然科学の研究で生物を用いる目的には、その生物自体のことを知りたいために用いる場合と、ある現象や機能を解明するための材料として用いる場合があります。今までは、“ホンダワラとは何だ？”という思いでホンダワラ属を主な材料として用いてきました。最近では、“藻場とは何だ？”という目的で、沿岸域の環境や生物多様性を維持する上での藻場の様々な機能を解明するための研究に取り組んでいます。そのために、海藻藻場に加え全国各地のアマモ場でも調査をしています。そこに生育する魚類や葉上動物、ベントス性の動物との関わりを研究していく中で、藻場資源生物群集と藻場との相互作用への理解を一層深め、藻場が持続的に再生産するための機構や、生物群集に与える藻場機能の解明に取り組んでいきたいと思っています。そしてこれらの成果が、研究を始めた頃の“ホンダワラとは何だ？”という思いに再びつながっていくものと考えています。

日本藻類学会創立60周年、おめでとうございます。私が入会させていただいてから13年が経ちました。学生の頃から今も、海に潜って調査をしています。最初は、海の中でキラキラと波に揺れているヒジキに感動しました。波が激しく打ち付ける岩上に生える海藻に驚きながら、自分も必死になって岩にしがみついて観察しました。藻場を泳いでいる魚の群れに目を奪われました。今も海に潜ると、海の中って面白い！がたくさんあります。これからもこの思いを大事にしながら研究に取り組んでいきたいと思っています。

(水産総合研究センター瀬戸内海区水産研究所)